

〈研究ノート〉

「母音」, 「子音」, 「音節」という 用語について

阿久津 智

要 旨

「母音」と「子音」とは、vowel, consonant の翻訳語として、明治元年ごろから使われ出した和製漢語のようである。「母音」が日本文典・英文典（洋文典）の両方で使われた語であるのに対し、「子音」は、当初、主に英文典で使われた語であった。日本文典では、明治中期～後期に、「父音」が多く使われた。江戸時代には、洋学を中心に、母音を表すのに、「韻字」, 「母韻」, 「韻母」, 「音母」, 「母字」などが使われ、子音を表すのに、「父字」, 「子韻」, 「子字」などが使われた。この「父・母・子」は、反切用語から来たもののようである。

「音節」は、本来「ふしまわしやリズム」という意味の語であったが、1900年ごろから syllable の翻訳語として使われるようになった。それ以前は、日本文典では、「子音」, 「子韻」, 「複音」, 「単音」など、音（構造）に関する名称が主に使われ、英文典では、「連綴」, 「綴字」, 「綴音」など、つづりに関する名称が主に使われた（「熟音」は両方で使われた）。この両者における名称の違いは、日本文典と英文典における関心の違い（日本文典における五十音、英語における正書法）を示すものと思われる。

キーワード：母音, 子音, 父音, 音節, 語誌

1. はじめに

本稿では、日本語音韻論・音声学分野の基本的な用語である、「母音」、「子音」、「音節」を中心に、これらの用語が、いつごろから使われるようになったのか、同様の概念を表す別の言い方にはどのようなものがあったのか、などについて見ていく。また、それらの語がどこから来たのかについても、考えてみたい。以下、専門的な概念としての、母音、子音、音節 (vowel, consonant, syllable) と、(使用例における) 文字列としての、「母音」、「子音」、「音節」とを区別するため、とくに「概念」を表すために使用するときには、《 》でくくって示す。ただし、ここでは、それぞれについて、細かい定義は行わず、今日、一般に、母音、子音、音節とされるものとある程度重なるものを、すべて《母音》、《子音》、《音節》を表すものとしておく。

「母音」、「子音」、「音節」については、今日では、それぞれ、英語の vowel, consonant, syllable の概念を表す語 (翻訳語) として定着しているが、昭和の初めごろまでは、必ずしもそうではなかったようである。昭和の初めの主な日本語音韻論・音声学の概論書を見ると、今日と同様に、「母音」、「子音」、「音節」が使われているものが多く (佐久間鼎『日本音声学』京文社・柳原書店 1929, 神保格『国語音声学』明治書院 1933, 金田一京助『国語音韻論』刀江書院 初版 1931, 増補版 1935 など), これらの用語がほとんど定着していたようすがうかがえるが、一方で、菊沢季生『国語音韻論』(賢文館 1935) のように、一部に別の用語が使われているものなどもある (母音に「母韻」が、音節に「成音」が使われている。これについては、「三矢重松博士の『文法論と国語学』に従った」(菊沢 1935: 13) とあるが、三矢の書では、「母音」や「音節」の語も用いられている (三矢重松『文法論と国語学』中文館書店 1932: 369))。さらに時

代をさかのぼると、明治中期の日本文典（日本語文法書）類では、『母音』に「母音」（「母韻」も見られる）、『子音』に「父音」、『音節』に「子音」が多く使われている（落合直文・小中村義象『日本文典』1890、高津敏三郎『日本中文典』1891、関根正直『国語学』1891 など。明治以前の文献については、出版元を省略して記す。以下同じ）。

これらの用語をめぐるのは、明治後期の新聞記事に、岩野泡鳴と前田林外（ともに詩人）との、次のような論争が見られる（「読売新聞記事データベース」（読売新聞「ヨミダス歴史館」）による。漢字の字体は、中国語の文献を含め、現代日本語の通用字体を用いる。傍点や傍線は省略する。ルビは一部を除いて省略する。〔 〕内は筆者。網かけは筆者。以下同じ）。

（例1）氏〔前田林外〕が氏の所謂独立音として数へるうちのンでさへ、現代の発音法に拠れば、何か一つの母音^{ほ い ん}を待たなければ独立が出来にくいのだが、短歌または新体詩に於ては、普通に独立音と見^み為^なされてゐるのは、恰^{あたか}もシエキスピヤ時代にKing^{き ん ぐ}といふ語がまだ一音節^{おんせつ}でなく、二音節^{おん}に別れて、Ki^き—ng^{ん ぐ}と発音されることがあつた、その第二音節^{おん}と同じ価値であるのだ。況んや純粹の父音^{ふ お ん}、乃ち頭音^{すなは とうおん}に於てをやだ。たとへばカ行の頭音^{おん} (k) またはタ行の頭音^{おん} (t) が、たゞそれだけでは、ひゞき（サウンド）はあるが、音^{おん}（^{ママ}ダイズ）には、ならない。ひゞきだけでは音にはならないが、音を有する母音^{おん}と一緒に綴られて、初めてその綴音^{せつおん}の独立した発音が出来るのだ。（岩野泡鳴「前田林外氏に答ふ」『読売新聞』1909年1月3日）

（例2）氏〔岩野泡鳴〕は熟音^{じくおん}といふ立派な用語があるのに「一音節^{おん}」といふコ デ ツ ケ の語を使つてゐるのは悪いことだ。又字母の研究をするのに子音^{しおん}といふべき所を「頭音^{とうおん}」といふ語を使つてゐる。共に滑稽式だ。頭音^{とうおん}といふ語は頭韻^{とうおん}であつてアルテレーション^な杯^{など}を論ずる場合に使ふべき語だ。（前田林外「音韻問題（附岩野泡

鳴氏を追撃す)』『読売新聞』1909年1月10日)

(例3) 氏〔前田林外〕はまた「音節」といふ用語をこちつけだと云つたが、これは英語のシラブル (Syllable) に当る語で、語学者は普通にこれまで使用して来たのだ。〔中略〕また、氏は頭音と頭韻とを混同してゐるが、僕が頭音といふのは、五十音中、ア行を除いたすべての行のコンソナントであつて、之を父音または子音と云はないのは、わが国語学者の慣例中に、それと母音との熟合した音、乃ち、カ、サ、タ、等をも父音または子音と呼ぶこともあるからである。(岩野泡鳴「三度、林外氏を駁す」『読売新聞』1909年1月17日)

(例4) 「音節」といふ語は Ton 又は Tonalite^{〔ママ〕} それから Comme ensemble に当るのだ。日本語でいへば、音調の曲折変化する調子だ。短くいへば音律だ、音階だ、音度だ。だから「音節」杯^{など}とはいはずに何ぜ綴音又は熟音とはいはないのだと尤めたのだ。〔中略〕又頭音とは滑稽だ。母音を頭にして綴音する場合は僕等には沢山ある、そんな場合には氏のカ行以下の頭音説は直ちに究^{〔ママ〕}するのだ。だから、今時小学校の小供でも字母の綴音を頭音だの後尾音^{こうびおん}だのいふ鈍物はないのだ。子音^{しいん} 母音で結構だ。適切だ。
(前田林外「小説材料問題 (つゞき)」『読売新聞』1909年1月31日)

ここに現れた用語を整理すると、《子音》を表す用語には、「父音」、「子音」、「頭音」、「コンソナント」があり、《音節》を表す用語には、「父音」、「子音」、「音節」、「綴音」、「熟音」、「シラブル」があつて、岩野泡鳴は、(五十音における)《子音》に「頭音」、《音節》に「音節」を用い、前田林外は、《子音》に「子音」、《音節》に「熟音」または「綴音」を用いているということになる (なお、これらの記事の中では、「子音」には「しいん」と「しおん」と、「母音」には「ぼいん」と「ぼおん」と、「綴音」に

は「せつおん」と「てつおん」と、いずれも2通りのルビが振られている)。

ところで、1929年に中国で出た「声韻学」(漢語音韻学)の概論書には、次のようにある(〔 〕内は筆者による訓読(訳)。以下同じ)。

(例5) 声母、依西文当訳曰輔音、曰僕音；依日文当曰子音、曰熟音。

韻母、依西文当曰元音、依日文当曰母音。〔中略〕日文謂声母為子音、熟音云者、以其多用首行ア、イ、ウ、エ、オ、五母音、為収声之故；謂韻母為母音云者、以其為子音所由成也。〔声母(ここでは子音のこと)は、西文(ヨーロッパの言語)に依りて当てて訳して「輔音」とい^い、「僕音」とい^い、日文(日本語)に依りて当てて「子音」とい^い、「熟音」とい^う。韻母(ここでは母音のこと)は、西文に依りて当てて「元音」とい^い、日文に依りて当てて「母音」とい^う。(中略)日文に声母を謂^いて子音、熟音と為すと云う者は、其の、多く首行の「ア、イ、ウ、エ、オ」五母音を用いて、収声(音節末の音)と為すの故を以てなり。韻母を謂^いて母音と為すと云う者は、其の子音の由りて成す所と為るを以てなり。〕(張世禄『中国声韻学概要』(台四版)台湾商務印書館1978:49(1929初刊))

ここでは、「声母」に当たる語には、ヨーロッパ語からの翻訳語の「輔音」と「僕音」と、日本語からの「子音」と「熟音」とがあり、「韻母」に当たる語には、ヨーロッパ語からの翻訳語の「元音」と、日本語からの「母音」とがあることが述べられている(後半は、日本語の音節は「子音+母音」という構成をとる(それがこれらの名称と関係している)ということが述べられている)。

以上の例1~例5からは、日本語において、(ア)《子音》や《音節》を表すのに複数の語が使われていたこと、(イ)《子音》を表す語と《音節》を表す語とに混用(混同)があったこと、(ウ)「母音」と「子音」とは日本で作られた語であるらしいこと、などがうかがえる。そこで、以下、「母音」、

「子音」,「音節」(の概念を表す語)を中心に、これらの用語が、いつごろから使われるようになったのか、同様の概念を表す言い方にはどのようなものがあったのか、などについて見ていく。また、それらの語がどこから来たのかについても考えてみたい。なお、本稿では、音声学・音韻論における専門的な内容(議論)には立ち入らない。

2. 母音と子音

2.1 「母音」,「子音」の使用の始まり(明治以降)

まず、「母音」と「子音」という語が、いつごろから使われるようになったかについて見ていく。

「母音」と「子音」とは、『日本国語大辞典 第二版』(小学館 2000～2002。以下『日本国語大』)によれば、それぞれ、「言語音の分類の一つ。呼気が持続的に口腔を通過する際の共鳴によって生ずる音。〔以下略〕」,「言語音の分類の一つ。母音以外の音の総称。発音の際に、舌・歯・口腔・唇などの発音器官によって呼気の通路を狭めたり、閉鎖したりすることによって発する音。〔以下略〕」である(これ以外の意味はない)。同辞典に載っている両語の最も古い用例は、西周『百学連環』(1870～71 頃)の「文字に consonants (子音) 及び vowel (母音) の二種あり」である(なお、これらには読み仮名がなく、これらをどう読んだかは不明である)。

西周『百学連環』とほぼ同時期の 1869 年に出た薩摩学生編『改正増補和訳英辞書』(いわゆる「薩摩辞書」)には、この両語がルビ付きで現れている(以下、用例の収集には、書籍・雑誌のほか、「国立国会図書館デジタルコレクション」,「国文学研究資料館 電子資料館」,「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」,「グーグルブックス」,「中国哲学書籍電子化計画」,「近代史数位資料庫」を用いた。辞典における品詞の略号等は省略した。／は改行、または、別ページを示す。以下同じ)。

(例6) ^{コン} ^ソ ^ネ ^{ント} ^シ ^{イン} ^{「ウヲウ」} ^ル ^ボ ^{イン}
Consonant 子音 / Vowel 母音 (薩摩学生編『改正増補 和訳
英辞書』(薩摩辞書) 1869)

また, 1867 年刊のヘボンの『和英語林集成』(初版)の英和の部には,
「Vowel」の項に「boin」が現れている。「Consonant」は, 同辞典の初
版には見出しがなく, 第2版(1872年刊)で現れる。

(例7) Vowel Jibo; boin. [「Jibo」は「字母」, 「boin」は「母音」
(あるいは「母韻」か) だと思われる] (J. C. Hepburn『和英語
林集成 A Japanese and English dictionary, with an English
and Japanese index』1867)

(例8) CONSONANT Shi-in, ko ji. [「Shi-in」は「子音」(あるい
は「子韻」か), 「ko ji」は「子字」だと思われる] (J. C.
Hepburn『和英語林集成 第二版 Japanese-English and Eng-
lish-Japanese dictionary』1872)

ほかに, 「慶応三年十二月」(1867年12月ないし1868年1月)の跋の
ある堀秀成『言霊妙用論』(1877刊)に, 「母音」が使われている。「母音」
と「子音」が文献に現れる最も早い例は, (筆者の調べた限りでは) 上に
挙げたものであるが, この両語は, おそらくこのころ(明治元年ごろ)か
ら使われるようになったのではないかと思う。

ところで, vowel と consonant に関して, 19 世紀の英華字典類には,
ロブシャイド(羅存徳, W. Lobscheid) 編『英華字典 English and Chi-
nese Dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation. Part III』
(1866)に, 「Consonant 同音字母」, 「Vowel 自音之字」とあり, 鄭其
照編『華英字典集成 An English and Chinese Dictionary』(1899)に,
「Consonant 無音之字母」, 「Vowel 自音之字」とある。モリソン(馬礼遜
R. Morrison) 編『A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE,
PART III』(1822), ウィリアムス(衛三畏 W. Williams) 編『英華韻府
歷階 An English and Chinese Vocabulary in Court Dialect』(1844),

メドハースト（麦都思 W. H. Medhurst）編『English and Chinese Dictionary』（1847～1848）、ドーリットル（盧公明 J. Doolittle）『英華萃林韻府 Vocabulary and Handbook of the Chinese Language』（1872）には、「vowel」と（子音の意味での）「consonant」とは立項されていない。「母音」と「子音」（および、その同義語）とは、20 世紀初め（1908 年刊）の顔惠慶編『英華大辞典』に現れる。

（例 9） Consonant 〔中略〕 A letter of the alphabet, as *d* or *g*, which cannot be sounded without the aid of a vowel, 字母中之無音字母, 僕音, 跟音, 子音 / Vowel A sound uttered by simply opening the mouth or vocal organs, as the sound of *a*, *e*, *o*, 元音, 喉音, 母音, 母韻（即 *a*, *e*, *i*, *o*, *u* 之音）（顔惠慶編『英華大辞典 An English and Chinese Standard Dictionary』1908）

同辞典は、「例言八則」に、「是編採用諸書。暨所参考。不下数十百種。〔中略〕有為英和字典本者。」〔是の編は諸書を採用（採用）し、参考する所に暨^{いた}りては、数十百種を下らず。〔中略〕英和字典を本と為す者有り。〕とあるように、英和辞典から多くの「日本製の訳語」（新語）を取り入れている（沈 2008：211）。一方で、「ヨーロッパ言語から直接に訳語を考える西洋系の学者たち」は、「日本の訳語に強い反発を示し、独自の訳語を主張し続け」（沈 2008：210）、その代表である嚴復は、1904 年刊の英文法書『英文漢詁』で、「Vowels 元音」, 「Consonants 僕音」と訳している。また、高野（2004：123）は、「母韻（母音）Vowel-sound」と「子音（子韻）Consonant-sound」とを「和製漢語」として扱っている。以上から、「母音」と「子音」とは、日本で作られた語である可能性が高いように思われる。なお、中国語では、20 世紀の初めには、vowel と consonant に対して、さまざまな訳語があったが（例 5・例 9 にあるもの以外に、たとえば、呉敬恒が 1917 年に発表した「読音統一会進程序」には、《子音》に「無音」, 「啞音」などが、《母音》に「有音」, 「響音」などが挙

げられている (呉敬恒, 劉紹唐主編『国音国語国字 第一集』伝記文学出版社 1960: 137)), 1940 年ごろには, 中国を代表する言語学者たちが「元音」と「輔音」とを使うようになり (代表的な著作は, 高本漢 B. Karlgren, 趙元任・羅常培・李方桂訳『中国音韻学研究』1940), それを引き継いで, 今日では, 「元音」と「輔音」とが最も一般的になっている (なお, 台湾では, 「母音」と「子音」もよく使われる)。

さて, 明治期の語学書には, 《母音》と《子音》とを表すのに, 「母音」と「子音」以外の語も使われている。英語関係 (英文典など) では, 明治初年に, 「母韻」と「子韻」 (大学南校助教訳『^{クワッケンボス}格賢勃斯 英文典直訳 卷之上』1870, 亜遊居人『英学教授』1871 など) や, 「母字」と「子字」 (青木輔清『英学之部 初編 横文字独学』1871, 浦谷義春『英学辞訓 一名・スペリング独学』1871 など) などが見られるが, 明治中期には, 「母音」と「子音」とが一般的になっている (「母音」と「子音」の早い時期の使用例には, 柴田清熙『洋学指針 英学部 二編』1871, 山田正精訳『英学必携 上』1872 などがある)。

一方, 日本語関係では, 明治初期の文典 (文法書) には, 母音には, 「母韻」 (古川正雄『絵入智慧の環 二編下』1871, 藤沢親之『日本消息文典 上ノ巻』1874, 田中義廉『小学日本文典 一』1875) や, 「母音」 (中金正衡『大倭語学手引草 前篇』1871, 渡部栄八『啓蒙 詞のたつき 一』1875, 中根淑『日本文典 上巻』1876 など) が多く使われているが, 《子音》を表す語はあまり使われていない。「父音」 (小笠原長道『日本小文典』1876, 吉川楽平『国語教授式』1877, 関治彦『語格楷梯 日本文法 卷壺』1879 など) や, 「子韻」 (藤沢親之『日本消息文典 下ノ巻』1874, 春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』1877) が見られるものの, 「もとごゑ」 (古川正雄『絵入智慧の環 三編下』1872), 「^{モトコエ}本音」 (天野春翁『言葉の踏分』1877), 「原音」 (物集高見『初学日本文典 上』1878) などという言い方も使われており, 明治初期には, この概念を表す語が未定着だったことをう

かがわせる。

(例10) 父音ト云フ字ハ別ニアラザレドモ、母韻ノミニテ子韻〔《音節》〕ノ生ス可キイハレナシ。故ニウクスツヌフムユルノ九字ヲ以テ仮ニ父音トナシ、母韻ト相合^(ママ)ノテ子音〔《音節》〕ヲ生ゼシム。〔句読点は筆者〕(小笠原長道『日本小文典』1876:4ウ)

(例11) 本邦単に子韻の字を製らず。其母韻に配合して全き声をなす者〔《音節》〕に就きて字を製る。故に今かりに其配合の音の者を以て子韻と名づけて母韻とわかてり。〔句読点は筆者〕(春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』1877:5オ)

(例12) 母音ト相重ナル所ノ子音〔《音節》〕ニ七個ノ原音アリ。ク ス ツ ヌ フ ムルト云フ其声隱微ニシテ未ダ全ク明ナラザル者トス。今仮ニ此隱微ナル声音ノ記標ニ^カ扁^ク傍^カ仮字ノク ス ツ ヌ フ ム ルヲ用ヒテ母音トノ結合ヲ説カバ、先ツクト母音ト重リテ「かきくけこ」ノ五音成リ、スト母音ト重リテ「さしすせそ」ノ五音成リ、〔句読点は筆者〕(物集高見『初学日本文典 上』1878:2オ)

その後、明治中期～後期には、《母音》に「母音」、《子音》に「父音」が多く使われるようになった。「子音」は、「父音+母音」の《音節》の意味で多く使われている。そのほかに、《子音》には、大槻文彦が『日本辞書 言海』(1889)で用いた「発声」も用いられた(大平信直『中等教育国文典』1899, 教育学術研究会『師範教科 国語典 上巻』1904, 林治一『日本文法講義』1907など)。

(例13) ^{アギヤウ}阿行ノ五音ハ、^{タンオン}喉ヨリ単一ニ出ツ、コレヲ^{カギヤウ}単音ト名ヅク。加行以下、九行ノ諸音ハ、^{ギヤウ}其行毎ニ、各、其音ヲ呼ビ^{オコ}発ス一種ノ声アリテ、コレヲ^{ハツセイ}発声(Consonant.)ト名ヅケ、^{ヒビキ}単音、ソノ韻トナリ、^{ジユクオン}発声ト、^{ナツ}単音ト、相熟シテ、始メテ音ト成ル、此ノ故ニ、加行以下ノ九行四十五音ヲ、^ボ熟音(Syllable.)ト名ク、^{セン}単音ハ、斯ク発声ノ韻トモナルガ故ニ、亦、^{ヒビキ}母韻(Vowel.)ノ称アリ。

(大槻文彦『日本辞書 言海』「語法指南 (日本文典摘録)」1889 : 2)

「発声」には、「音を出し始める」という意味があり、そこから「音節の始めの音」という意味に使われたようである。なお、近現代の中国の文献にも (一般語としての) 「発声」はよく見られる。また、清代には、江永、江有誥、陳澧、洪榜などの音韻学者が、『子音』の分類 (無気閉鎖音など) に「発声」という用語を使っているが、この用語の用法には、学者によって、多少の異同があった (『伝統言語学辞典 第2版』河北教育出版社 2010 「発声」)。近現代の中国語の例を挙げておく。

(例14) 考人類の発音機関 (Organs of Speech) 総是一様, 就其發声部位而言謂之『**声**』; 就其收音於喉而言謂之『**韻**』。所以最單純之『**声韻**』, 各国大略相同。記諸紙, 表**声**者謂之『**声母**』 (Consonants); 表**韻**者謂之『**韻母**』 (Vowels)。〔人類の発音機関 (Organs of Speech) を考うれば、^{すべ}総て是れ一様なり。其の「**發声**」部位に就いて言へば、之を「**声**」と謂い、其の喉に「**收音**」するに就いて言へば、之を「**韻**」と謂う。所以に最も單純の「**声韻**」は、各国大略相同なり。諸を紙に記せば、「**声**」を表す者は、之を「**声母**」 (Consonants) と謂い、「**韻**」を表す者は、之を「**韻母**」 (Vowels) と謂う。〕 (国人「注音字母与万国音標」『東方雜誌』17-10, 1920)

(例15) 用現代語言学上的名詞説来, **声母**就是一個字的**發声**, 等於英文的 initial; **韻母**就是一個字的**收音**, 等於英文的 final。〔現代言語学の用語を用いていへば、**声母**は1つの漢字 (音節) の「**發声**」であり、英語の initial に等しく、**韻母**は1つの漢字の「**收音**」であり、英語の final に等しい。〕 (王力『漢語音韻学』(重版) 中華書局 1980 : 40 (1935 初刊))

日本語学の分野において、『子音』に「子音」が一般的になるのは、大

正期以降のこのようであるが、明治期の日本文典にも、《子音》に「子音」を用いた例は見られる（ビー・エッチ・チャンブレ『日本小文典』1887、和田万吉『新撰国文典』1897、岡沢鉦次郎『初等 日本文典 前編上』1900 など）。

- （例16）ア行の五音を母韻と名づく。カ行以下諸行の音を熟音と名づく。熟音は母韻と他の一種の音と熟合したる声音なり。こゝに他の一種の音といへるものを子音と名づく。子音は仮名にて書きあらはす便宜なきが故に、こゝに示すこと能はざるなり。カ行以下每行の五熟音に通有にして、且つ各音の頭を成す一種の声あるを、よび試みて知るべし。これ即ち子音なり。（和田万吉『新撰国文典』1897：7）

2.2 「母音」、「子音」の使用以前（江戸時代まで）

次に、「母音」、「子音」という語が使われる以前に、《母音》や《子音》が何と呼ばれていたかについて見ていく。江戸時代の洋学資料（辞書や語学書）では、《母音》には、「韻字」が多く使われている。

- （例17）句字ヲ「キリンクレーテル」〔klinkletter〕ト云。又「ホカーレン」〔vocaalen〕トモ称ス。Aeiou 是ナリ。又 y 字ヲ添テ、六字ノ「ホカーレン」ト云。余ノ十九字ヲ「メデキリンクレーテル」〔medeklinkletter〕ト称ス。又「ストーメ」〔stomme〕トモ云。「メデ」〔mede〕トハ連ル、コト也。「ホカーレン」ニ連從シテ、「セイラプ」〔syllabe〕ヲナスナリ。「ストーメ」トハ瘡字〔啞字〕ト云コト也。愚按ルニ、此十九字「ホカーレン」ニ從ハザレハ、音句ヲ如何トモ発スルコト能ハス。故ニ此称アルナルヘシ。〔「句」は「韻（韵）」の略体〕〔句読点は筆者〕（前野良沢『和蘭訳文略草稿』1771 識語）

- （例18）上ノ二十六字ノ中六字ハ、ア、ンエ、ンイ、オ、ンウ、ンエイ、

〔aeiouy〕ノ韻字ニシテ, 其名即ソノ音也。「キリンクレット
ス」〔klinkletters〕ト号ス。「キリンク」〔klink〕ハ即韻字の義,
余ノ二十字ヲ「メデキリンクルス」〔medeklinkers〕ト号ス。
「メデ」〔mede〕ハ相合せ連ルヲ云。韻字ニ連合シテソノ音ヲ成
ス義也。〔句読点は筆者〕(大槻玄沢『蘭学階梯 下巻』1788 刊:
9 オ (1783 成立))

(例19) ^{〔ママ〕}kliner 韻字／medeklinker. 六韻字ノ外ノ文字／vocal. 韻字
(Halma, François, 稲村三伯『Nederduits woordenboek』(江
戸ハルマ, ハルマ和解) 1796 刊)

(例20) klinker. 音母／medeklinker. 音母／vokaal. 韻字 (道氏
Doeff, Hendrik 訳, 桂川甫周他校訂『和蘭字彙』1858 刊)

(例21) consonne, 合音／voyelle, 韻字 (村上英俊『仏語明要』1864
刊)

「韻字」は, 古くから, 「漢詩文で, 韻をふむために句の末に置く字。脚
韻に用いる字。」や, 「漢詩の脚韻を和歌にあてはめて, 一首の末に置かれ
る語とされたことば。」(『日本国語大』「韻字」) として使われてきたが,
上の例では, 「母音字」という意味で使われている。「韻」には, 脚韻に用
いる音 (音節の後ろの部分) として, 古くから, 《母音》を表す用法があっ
た。中国唐代の例を挙げると, 日本における悉曇学 (インドの音韻学) の
創始に大きな影響を与えた『悉曇字記』に, 《母音》(字) に, 「韻」, 「摩
多」(梵語 mātā の音訳) が, 《子音》(字) (母音 a を潜在させる) に,
「声」, 「体文」(梵語 vyañjana の意識), 「文」(同左) が使われている。

(例22) 其ノ始^{マサニカフラ}ニ曰^{シメテ}「^{下シノ}悉曇^ノ之首^ニニ^{ハツ}対^シレ^声呼^テ而^モ発^スレ^韻ヲ。声^合ウ^レ韻^ニ而
字生^ス焉。〔中略〕其次^ニ体文^ニ三十有五ナリ。通^{シテ〔?〕}ニ前^ノ悉曇^ニ四
十七言明^ケシ矣。声^{ハツ}之所^ロハ^{ハツ}発^{スル}ニ^ガ則^チ牙^シ齒^{ゼツ}舌^{コウ}喉^ウ唇^{シン}等^{ナリ}。ノ初章^ハ将^テニ
前^ノ三十四^ノ文^ヲニ^キ対^{シテ}ニ阿^ニ阿^ニ等^ノ十二^ノ韻^ニニ^ヨ呼^{ンテ}レ^之ヲ^マ増^{スニ}以^テス

摩多^{マダ}。生字四百有八^{ナリ}。(智広『悉曇字記』794 頃成立、根来寺往生院 1447 刊：3 ウ、5 オ)

ほかに、平安時代の日本の悉曇学書には、《母音》に「韻音」や「音韻」を用いた例も見られ、鎌倉時代以降は、《母音》と《子音》とに、それぞれ、「韻」と「音」とが使われるようになった(釘貫 2007：29, 35)。

(例23) 阿等^ア十六音^{ジュッパツオン}皆^{ナリ}是^レ韻音^{オン} (安然『悉曇蔵』880 成立、『校正悉曇蔵 一』「序」1789 刊：4 オ)。

なお、例 17 (および、例 30) にある「瘞字(啞字)」は、引用文中にあるように、「ストーメ」(stomme。『江戸ハルマ』によると「啞人」)の翻訳語である。この名称は、《子音》のもつ「聞こえが小さい」という性質に基づいたものであろう。例 20 では、「音母」が、《母音》と《子音》の両方に使われているが、これは、(表音文字における「字母」と同じように)「言語音(の一つ)」というような意味で用いられているのではないかと思われる。例 21 の「合音」は、例 17 に説明のある「メデキリンクレーテル」と同様に、「母音に合わさる音」(例 24 の「所合^ア声」に当たる)という意味での造語(翻訳語)ではなかろうか(英語の consonant も、『『母音と一緒になり響く音』が原義』である(『ジーニアス英和大辞典』大修館書店 2001))。

ほかに、江戸時代の文献では、《母音》には、「音母」、「母字」、「母韻」、「韻母」のように、「母」を含むものが多くあり、《子音》には、「父字」、「子韻」、「子字」など、「父」や「子」を含むものが見られる。

(例24) 今此^ア a 等^ア五字^ア短声^ニ而^テ撰^ル長声^ニ及^ヒ空(撥音)涅槃〔入声〕^ノ声^ヲ、能^ク出^ス生^ス一切^ノ音韻^ヲ。就^テレ出^ス生^{スル}之^ヲ以^テカ^カサ^タ na 等^ナ九字^ヲ為^ス所合^ア声^ト、a 等^ア五字^ヲ為^ス能合^ア韻^ト、所合^ア声^ヲ為^ス父字^ト、能合^ア韻^ヲ為^ス母字^ト、声^ノ声^ノ韻^ノ韻^ノ各^ノ合成^ス反音^{スル}。〔句読点は筆者。梵字はローマ字に翻字した〕(盛典『新增韻鏡易解大全』「卷一 韻鏡易解改正卷一 第二 五韻拗直図説門」)

1718 刊: 13 ウ)

(例25) 図面七音清濁ノ差別ニヨリテ三十六母〔36 種の声母〕ノ配位アリ。又左辺ニ各各^{シル}韻母ノ字ヲ識ス。是音^{シル}韻ノニツナリ。〔句読点は筆者〕(文雄『磨光韻鏡後篇 指要録』「開卷知音」1773 刊: 4 ウ)

(例26) 彼邦の国字を「アベセ」といふ。吾邦のいろはの如し。父^ナ字二十字に母^ナ字五字をつゞりて万の音をしるす。〔句点は筆者〕(森嶋中良『紅毛雑話』巻之三「唐土の文字」1796 刊: 11 ウ (1787 成立))

(例27) 按スルニ。^{ア エイ オ ウ エイ}AEIOUYノ六字ハ。単呼定音ヲ倣シ。他音ニ変ゼズ。故ニ之ヲ韻母トシ。其余二十字ヲ子字トス。(藤林普山『訳鍵 凡例并附言』1810 刊: 7 ウ)

(例28) ^{ホ ウ エ ル}vowel 音母 (本木庄左衛門ら編『諳厄利亜語林大成』1814 成立)

(例29) 古来, 「アイウエオ」ノ五音ヲ, 字^ナ母ト称ス, 今日ヲカヘテ, 音母ト云フ, 実ニ音ノ母ニシテ, 何レノ音モ, 此ノ「ア」行ノ音ヨリ, 出デザル者無ク, 且何レノ音モ, 此ノ「ア」行ノ音ヲ, 含マザル者無シ, (鳥海松亭『音韻啓蒙』「総論」1816 刊: 9 ウ)

(例30) 之〔ア, イ, ウ, エ, オ〕ヲ漢土ヨリ先ツ邦々ニ求ムルニ, 此五音母ナキ国ナク, ソノ仮字ナキ地モ亦ナシ。サレハ, 此五韻母字コソ天然ノ音ナル可ケレ。／^アA ^エE ^イI ^オO ^ウU／以下^ナ啞字即父字二十字皆協合^ナ以上五韻母字^ナ。〔句読点は筆者〕(大槻玄幹『和音唐音対注 西音発微』1826 刊: 3 オ, 21 オ)

(例31) 但し此^ナ音図. すでに再訂せる神字日文伝にも出せるが, 彼^ナ書に釈たる. 母韻アイウエオ. 父^ナ声ウクスツヌフムユウルの説等を合せ考へ. 彼此相発して其^ナ精義を索むべきなり. 〔日文は省略〕(平田篤胤『古史本辞経』「五十音図訂正 第三」1850 刊: 25

ウ (1839 成立))

(例32) klinker. 母韻 / medeklinker. 子韻 (飯泉士讓『和蘭文典字類前編』1856 刊)

(例33) 母子之別 第一韻母 A a [中略] 第二韻母 E e [以下略] / voortdrÿven van medeklinkers 語首子字直進 (柳川春三『洋学指針』1857 刊: 3 ウ, 5 ウ)

(例34) Consonant 子字 / Vowel 音母 (堀達之助『英和对訳袖珍辞書』(初版) 1862 刊)

(例35) 字ニ母子ノ別アリ。韻母^{ヴ ヲ ウ エ ル}vowelハ一字独用シテ音ヲ発ス。子字^{コ ソ ネ ャ ト}consonantハ必ス韻母ニ合シテノミ音ヲ生ズ。独用スルコト無キナリ。(柳川春三『洋学指針 英学部』1867 刊: 4 オ)

以上のうち、「母韻」と「子韻」とは、明治以降も日本文典などで使われている (例 10, 例 11, 例 13 参照)。ところで、「母音」と「子音」の読み方には、「…いん」と「…おん」とがある。今日では、両音とも「…いん」と読まれることが多いが、これは、「母韻」と「子韻」の読み方が継承されたものかと思われる。

さて、上の例に見られる「韻母」は、今日の中国の音韻学で使われる、「一個音節中声母後面的部分」〔1 つの音節中の声母の後ろの部分〕(『中国語言文字学大辞典』中国大百科全集出版社 2007) である「韻母」と同形語である。しかし、この両者には、直接の関係はないようである。中国の音韻学で「韻母」と「声母」が使われるようになったのは、1918 年に中華民国教育部が公布した「注音字母表」で用いられてからのようで (なお、同表では、ㄟ i, ㄨ u, ㄩ ü は、「介音」として、「韻母」から切り離されている), これは、1913 年に教育部の読音統一会が「国音字母」を定めたときに用いた、「韻」と「母」とを改めたものである。『東方雑誌』1914 年 3 月号の邢島「読音統一会公定国音字母之概説」では、「韻」と「母」とが使われ、同誌 1916 年 12 月号の詹父「論国音字母」では、「韻母」と

「声母」とが使われている。この「母」は、声母を意味する「字母」の略称であり (林尹, 林炯陽註釈『修訂増註 中国声韻学通論』黎明文化事業 1982: 46 (1937 初刊)), 日本語における《母音》を表す「母」とは、用法が異なる。これについて、江戸時代の学僧、文雄は「母ハ反切ノ下ナル字〔母音〕ヲ指スト云フハ非ナリ」としている (文雄『磨光韻鏡後篇 伐柯篇』「反切字義」1773 刊: 13 オ)。

ここで、《母音》に使われる「母」、《子音》に使われる「父」と「子」がどこから来たのかについて考えてみたい。これらは、反切の用語から転用されたもののようである。反切とは、ある漢字の音を、他の漢字二字で表す方法で、一字目が声母を示し、二字目が韻母を示す。たとえば、「東」の音は「徳紅」で表される。これは、「徳 tək」の声母 t と、「紅 yuŋ」の韻母 uŋ とを合わせると、「東 tuŋ」の音になることを示している。日本の音韻学 (「日本韻学」, 悉曇学と漢字音研究が混交して発生した日本独特の学問 (馬淵・出雲 1999: 26)) では、伝統的に、この一字目 (反切上字) を「父字」、二字目 (反切下字) を「母字」と呼んできた。また、目的の字 (反切帰字) を「子字」と呼ぶこともあったようである。

(例35) 上父字行_レ豎下母字行_レ横其隅生_レ子字_／例伊上父_フ和下母_フ反_フ阿_フ隅子 (明魏『倭片仮字反切義解』1429 頃成立, 1800 親弥写)

(例36) 反切ニ用フル所ノ二字ヲ切韻トモ又ハ父字 母字トモ称ス。二字ノ用ヲ成スコトハ、父字ニテ字母ト音トヲ知ラシメ、母字ニテ韻ヲ知ラシメタルナリ。父字ニテ字母及ヒ音ヲ知ルトハ、字母ト云ハ三十六母ノ中ノ一字ナリ。音トハ呼ヒ出ス音ナリ。母字ニテ韻ヲ知ルトハ、韻ハ其呼ヒアラハス所ノ字音ノ尾ノ余声ナリ。

〔句読点は筆者〕 (文雄『磨光韻鏡後篇』「伐柯篇 反切総論」1773 刊: 1 ウ)

例 35 は、『日本国語大』で、「母字 (ははじ)」と「父字 (ちちじ)」の用例として挙げられているものである。ほかに、馬淵 (1984: 55, 68) に

は、鎌倉時代の悉曇学者である、承澄や了尊の韻図（五十音図）に使われた、「母」（母字）、「父」（父字）の例が見える。

（例37） 已上ノ五字〔ヤイユエヨ〕通ズ本末ニ。為ル母ト第二〔イ段〕ニ之時、為ル中字ト。故ニヤハ通ズ音韻ニ也。但シユ字ハ非ズンバニシノ下ニ無シ成スコト音ヲ。〔馬淵 1984：56 を参考に、句読点、訓点を施した〕（承澄『反音鈔』1299 写、馬淵 1984：55 の影印による）

この「母（字）」は、梵語で《母音》（字）を表す「摩多 mātā」から来ているようである。『漢訳対照 梵和大辞典 増補改訂版 新装版』（講談社 1986）によれば、mātā（＝ mātr）は「母」を意味する語である（英語の mother と同源（Oxford English Dictionary (June 2017 update)））。これについて、内田（2008：18）は、「他の音を『生む』という意味で『母』なのである。」と述べている。

一方、「父（字）」は、梵語で《子音》（字）を表す「体文 vyañjana」の訳ではなく（『漢訳対照 梵和大辞典』によれば、vyañjana の「漢訳」は「語、文、字、文字、言辞、文辞、文詞」などである）、「母」との対応から用いられるようになった語ではないかと思われる。また、例 35 にある「子字」は、「父字＋母字＝子字」という意味であろうが、『日本国語大』の見出しにもなく、反切用語としては、あまり使われなかった用語のようである。

ところで、《母音》を表す「母」、《子音》を表す「父」、《音節》を表す「子」は、中国の明代末にフランスのイエズス会宣教師ニコラ・トリゴー（金尼閣 Nicolas Trigault）が著した中国語の音韻書『西儒耳目資』の中でも使われている。

（例38） 一 創定音中。有自鳴。有同鳴。／一 創定同鳴為父。自鳴為母。父 母相合。共生字子。〔一、創定す、音中に「自鳴」（母音）有り、「同鳴」（子音）有りと。一、創定す、「同鳴」を「父」と為し、「自鳴」を「母」と為し、父母相合して、共に「字子」を生

ずと。) (金尼閣『西儒耳目資』「西儒耳目資釈疑」1626 刊)

これについて、張世禄は「此或声母与韻母之名所由来歟。」〔此れ或いは声母と韻母との名の由来する所か。〕 (前掲『中国声韻学概要』p. 46) と述べているが、この点については、不明である。しかし、少なくとも、日本では、これと同様の「父・母・子」の使い方が、さらに古い時代から行われており、それが、江戸時代を経て、明治以降の「母音」, 「父音」, 「子音」の名称につながっていったということはいえるように思う (中国では、この使い方は、あまり一般的ではなかったようである。文雄は、「又切韻〔反切〕ノ二字ヲ父字 母字ト称スルコト華人ハ多ク言ハサル所ナリ」と述べている (前出『磨光韻鏡後篇 伐柯篇』13 オ))。ただし、伝統的な反切における「父・母・子」の関係は、「父字+母字=子字」であり、この用法は、明治中期の日本文典における「父音+母音=子音」に継承されたが、英文典では、採用されず、「子音+母音=音節」が一般的になった (「音節」の使用は、次節で述べるように、明治後期からである)。今日では、日本語学でも、《母音》に「母音」が、《子音》に「子音」が使われているが、これは英語学 (洋学) における、「母音」と「子音」の用法が取り入れられたものといえる。なお、内田 (2008: 24) は、consonant の訳語に、「父音」ではなく、洋学に由来する「子音」が採用された理由について、「父音」は『ウ段音』という『単子音+単母音』であり、「反切を意識するときにはのみ使用され、カ行以下 45 音を意味する『子音』を説明するための概念」であるのに対し、「洋学者たちは音素文字の獲得によって現代の子音の概念を手に入れた」からだとしている。しかし、この「父音=ウ段音」については、日本文典において、「父音」をウ段音 (-u を含む音節) と見ているものは、ごく少数であり、大多数の文典では、「父音」を《子音》の意味で用いている。筆者が、明治初年から 1900 (明治 33) 年までに刊行された日本文典のうち、73 種について調べた結果では、「父音」が使われていた 36 文典のうち、はっきり「父音」をウ段音としているもの

は4文典のみであった（井田秀生『皇国小文典』1894，遠藤国太郎・鈴木重尚『日本文典教科書』1894，中邨秋香『皇国文法』1898，大林徳太郎・山崎庚午太郎『中学 日本文典 上巻』1898）。日本文典には、「父音」について、次のような説明が多く見られる。

（例39） こゝにまた、五十音の外に、**母音**と配合して、**子音**を生ずる、九個の声音あり。これを**父音**といふ。その音幽微にして、いまだ明に、音声にあらはれたるものにあらず。されば、これにあつる文字あることなし。今仮に、片仮字をもて、これを書きあらはす時は、ク ス ツ ヌ フ ム ユ ル 于〔ワ行のウ〕九個の音の幽微なるものなり。（落合直文・小中村義象『日本文典』1890：4）

（例40） **父音**とは、**母音**と融合して、**子音**をつくる一種の音なり。その音隱微にして、いまば、判然と口外にあらはれたるものにあらず。／されば、また、これを標すべき文字あることなし。今、仮に、片仮字を以て示すときは、五十音の字列の、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、ウ、の九個の**子音**より、**母音**を引き去りたる跡に残れるもの、即ちこれなり。（大宮宗司『初等教育 日本文典』1894：4）

これらの「父音」は、明らかに《子音》を表している。ただ、いずれにしても、「父音」は「カ行以下45音を意味する『子音』を説明するための概念」であり、《子音》を表す「子音」は、洋学者に由来するということはいえるようである。

3. 音 節

次に、「音節」という語について見ていく。

『日本国語大』に挙げられている、「音節」の、現代的な意味（「言語における音声の単位の一つ。ひとまとまりとして意識される音声連続。〔中

略] シラブル。」(同辞典「音節①」)) における最も古い用例は、上田万年『国語学の十講』(1916) の「日本の言葉は多音節主義である。一つの言葉が多くの音節から成立つのを原則としてゐる」であるが、これは、先に挙げた 1909 年の読売新聞の記事(例 1~例 4) よりも新しいものである。例 3 に挙げた記事に、「音節」について、「語学者は普通にこれまで使用して来たのだ。」とあることから、この語は、少なくとも、明治後期には、すでに(「語学者」の間では)よく使われていた語だと思われる。しかし、例 4 に「音調の曲折変化する調子だ。短くいへば音律だ、音階だ、音度だ。」とあるように、「音節」の本来の意味は、「声、または音楽の調子。ふしまわしやりズム。」(『日本国語大』「音節②」) であった。『日本国語大』には、「日本にむぎつき歌と云も、何事をもうたへども、其音節がむぎつくにあうを云ぞ」(『四河入海』1534 成立、慶長元和年間刊)、「右之本頗句音節墨譜等令加筆候」(浄瑠璃『新うすゆき物語』1741 刊) などの例が挙げられている(後者は、浄瑠璃本開板における常套句のようである(「ジャパナレッジ」『日本古典文学全集』の「全文」検索による))。

この「音節」本来の意味は、中国から伝来したもので、『日本国語大』や『辞源 第3版』(商務印書館 2015) では、『後漢書』「彌衡伝」の「聞衡善擊鼓、乃召為鼓吏、因大会賓客、閱視音節」[衡の善く鼓を撃つを聞き、乃ち召して鼓吏と為す。因って大いに賓客を会し、「音節」を閱視す。]が最古の例である。中国語には、今日でも、この用法が残っている(ほかに、『音節』の意味でも使われる)。

《音節》の意味で使われる「音節」の用例は、1900 年ごろから現れる。

(例41) 現今、学生ノ一般ニ学ブ、英語ナドノ如キ外国語ニアリテハ、其ノ音^{サウンド} トイフモノハ、所謂 字^{アルフ} 母^{アベ} ノ音ニシテ、通常、コノ音ドモ相集リテ、一ノ合音ヲ成ス。之ヲ^{シラブル}音節トイフ。(岡沢鉦次郎『初等 日本文典 前編上』1900: 34)

(例42) 今若し一塊の音を一音節と云ふとすれば、／父音はいつも母音

と組みあつて一つの音節を成し、こゝに初めて、ことばの中へ用ゐこまれるのが常であるから、(岡倉由三郎『発音学講話』1901: 111, 113)

この「音節」は、従来からある「音節」とは別に、syllable の翻訳語として生まれたもののようである (syllable は、『寄せ集められたもの、団結したもの』が原義) である (『ジーニアス英和大辞典』)。

明治前期～中期の日本文典・英文典には、このほかに、『音節』を表すのに非常に多くの語が使われている。なかでも、多いのは、「熟音」(大学南校助教訳『格賢勃斯 英文典直訳 卷之上』1870 が古い)、「子音」(中金正衡『大倭語学手引草 前篇』1871 が古い)、「子韻」(古川正雄『絵入智慧の環 二編下 詞の巻』1871 が古い) である (「熟音」は、日英両文典に見られるが、「子音」と「子韻」とは、主に日本文典に見られる)。

それ以外に、次のようなものが現れている (各名称につき、文典名を1つ挙げる。ほかの名称とともに現れる (単独では現れない) ものには、() を付した)。英文典 (洋文典) には、「連綴」(亜遊居人『英学教授』1871)、「綴り」(山田正精訳『英学必携 上』1872)、「(重音)」(片山清太郎・堀江章一『独修新法 英語学全書 前編』1886)、「綴字」(菊池武信『英語発音秘訣』1886)、「連字」(ゲールドブロラン、長野一枝『英吉利文典講義』1886)、「綴音」(大石高德『仏蘭西文法詳解』1899) などが使われている。一方、日本文典には、「(複音)」(古川正雄『絵入智慧の環 二編下 詞の巻』1871)、「単音」(春山弟彦『小学科用 日本文典 卷一』1877)、「(単子音)」(大和田建樹『和文典 上卷』1891)、「(合音)」(高津鋏三郎『日本中文典』1891)、「子母音」(大久保初雄『中等教育 国語文典』1892)、「(成熟音)」(小田清雄『応用 日本文典』1893)、「(客音)」(秦政治郎『皇国文典』1893)、「(配合韻)」(豊田伴『新撰日本文典 上卷』1895)、「成音」(中島幹事『中学 日本文典』1897)、「(複雑音)」(渡辺弘人『新撰国文典』1897)、「(綴字)」(上谷宏『中等教科 新体日本文典』1898) などが使われ

ている (例3や例5の記述と異なり, 《子音》に「熟音」を用いた例や, 《音節》に「父音」を用いた例は見られなかった)。英文典では, 表記 (つづり) に関係する名称が多く, 日本文典では, 音 (構造) に関係する名称が多く見られる。これは, 英文典の関心は正書法にあり, 日本文典の関心は五十音にある (阿久津 2017: 32) という, 両者の関心の違いを表しているように思う。

なお, 大槻文彦の『広日本文典 別記』(1897) には, 「音節篇 (Prosody.) の一篇は, 却て文法科に属すべきものなれど, 余が文典には, 姑く欠きたり。」(例言 p. 6) とあり, 音節本来の意味に基づいた使い方が見られる (大槻は, シラブルには「熟音」を用いている。例13参照)。

最後に, 江戸時代~明治中期の対訳辞典, 19世紀の英華字典を見てみると, 「SYLLABLE 切音, 分音」(前出メドハーストの英華字典 1847~1848), 「Syllable 字符ノ綴り」(前出『英和对訳袖珍辞書』1862, 薩摩辞書 1869), 「syllabe 文字綴」(村上英俊『仏語明要』1864), 「Syllable 字, 字音, 言之切音」(前出ロブシャイド『英華字典』1866), 「Syllable 音, 分音, 切音。」(前出『英華字典集成』1899), 「Syllable 字音, 連字」(柴田昌吉・子安峻『附音挿図 英和字彙』1873), 「Syllable 字音, 連字; 単字, 単語」(島田豊・辰巳小次郎増訂『附音挿図 和訳英字彙』1888, イーストレーキ, 棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書 和訳字彙』1888), 「Syllable 字音, 連字; 単字, 単音, 単語」(島田豊纂訳『双解英和大辞典 再版』1892) など, 英文典同様に, 表記に関係する名称が多く現れている。英華字典で, 「音節」が見られるのは, ヘメリング (赫美玲, K. Hemeling) の『官話 English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language and Handbook for Translators』(1916) の「Syllable 并音, 音節, 綴音」であるが, おそらくこの「音節」は, 日本語の用法を借りたものであろう。その後, 「音節」は中国語にも普及し, 言語学書にも, 「音節」が現れるようになっている (黎錦熙「漢字革命軍

前進の一条大路』『黎錦熙語言学論文集』商務印書館 2004 : 31 (1922 初刊), 前出『中国音韻学研究』1940 など)。

4. おわりに

「母音」, 「子音」, 「音節」がいつごろから使われるようになったのか, 同様の概念を表す別の言い方にはどのようなものがあったのか, それらの語がどこから来たのかについて, これまで見てきたことをまとめておく。

「母音」と「子音」とは, vowel, consonant の翻訳語として, 明治元年ごろから使われ出した和製漢語のようである。「母音」(「母韻」) が日本文典・英文典(洋文典)の両方で使われた語であるのに対し, 「子音」(「子韻」) は, 当初, 主に英文典で使われた語であった。日本文典では, 明治中期～後期に, 「父音」が多く使われたほか, 「発声」なども使われた。これらの用語に見られる「父・母・子」は, 反切用語に由来するもののようである。

「音節」は, 本来「ふしまわしやりズム」という意味の語であったが, 1900 年ごろから syllable の翻訳語として使われるようになった。それ以前は, 日本文典では, 「子音」, 「子韻」, 「複音」, 「単音」など, 音(構造)に関する名称が主に使われ, 英文典では, 「連綴」, 「綴字」, 「綴り」など, つづりに関する名称が主に使われた(「熟音」は両方で使われた)。この両者における名称の違いは, 日本文典と英文典における関心の違い(日本文典における五十音, 英文典における正書法)を示すものだと思う。

参考文献

- 阿久津智 (2017) 「明治期の日本文典における音韻」『立教大学日本語研究』24
立教大学日本語研究会
内田智子 (2008) 「母音・子音の概念と五十音図」『名古屋言語研究』2 名古屋言

語研究会

釘貫亨 (2007) 『近世仮名遣い論の研究：五十音図と古代日本語音声の発見』 名古屋大学出版会

沈国威 (2008) 『改訂新版 近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容』 笠間書院

高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究：日本語の造語法・訳語法』 明治書院

馬淵和夫 (1984) 『日本韻学史の研究 増訂版 II』 臨川書店 (1963 初版)

馬淵和夫・出雲朝子 (1999) 『国語学史：日本人の言語研究の歴史』 笠間書院

(原稿受付 2017 年 11 月 14 日)